

南浜湿原だより

第2号

2005.9.26

発行：利尻島自然情報センター 利尻町沓形字富士見町 小杉和樹 〒097-0401 Tel/Fax 0163-84-3145



雨の少ない夏

2005年、利尻の夏は雨が少なく、乾いた日が続きました。養殖昆布や天然昆布の漁には良かったのですが、畑や湿原にとっては大変なことだったろうと思っていました。それでも、湿原では今年もまたたくさんの植物たちが、花を咲かせてくれました。



エゾイソツツジは、白くて小さい花が手まりのようにまん丸くまとまって咲きます。

さて、南浜湿原には何種類くらいの植物（草木やシダ）があるのでしょうか？ 昨年は、そんな植物調査を、芽を出すのはいつで、花を咲かせるのはいつかといったことと、あわせて調べてみました。

その結果、南浜湿原には113種の植物がありました。このうちヤマドリゼンマイなどのシダ類が8種類あり、オオハンゴンソウなどの帰化植物は17種類もありました。南浜湿原に分布する植物の特徴としては、ワタスゲなどのスゲの仲間やエゾイソツツジ、ツルコケモモ、カキツバタ、ヤナギトラノオ、サワギキョウといった湿原性の植物が多いことがあげられ、南浜湿原の自然環境が豊かなことがわかります。

オオハンゴンソウの除去

6月18日から始めたオオハンゴンソウの除去は、これまでに約1万5千本の引抜きと約9千本の花芽（つぼみ）のつみとりをしました。

2回目の作業を行った6月28日には、草丈が2メートル近くになってしまい、湿原から運び出すのが大変で、花芽のつみとりに切り替えましたが、生き物というか、オオハンゴンソウの生命力はすさまじく、つみとった後からも、次々と花芽を出してしまうことがわかりました。やはり、根から引き抜かなければ効果は薄いと思われ、現在は引抜きや根の掘り起こしに切り替えています。今、オオハンゴンソウは花を咲かせ、種もつけてしまいましたが、雪が降るまで除去作業を続け、楽しみに春を迎えようと思っています。

あと、気になることがひとつ…。今年は少し減ったように感じましたが、キノコ採りの人たちがミズゴケを踏みつけ、アカエゾマツの根元を容赦勘弁無く歩き回ること…。何か決め事や秋だけの心配りを求める看板を立てることが必要かもしれません。



オオハンゴンソウは、江戸時代に観賞用として日本に渡来し、分布を広げました。

湿原の地下水位は変化しています

昨年の7月から、南浜湿原に地下水位を測る井戸を設置し、その変化を調べています。2005年7月からは沓形の種富湿原でも地下水位を測っていますが、どちらの湿原も雨が降ると地下水位が上がり（地面に近くなる）、好天が続くと地下水位が下がる傾向にあります。ただし、上がり下がりの割合やタイミングには、それぞれ違いがあり、地形や成り立ちが関係しているようです。

その変化をグラフにしてみると、湿原の地下水位は季節的な変化、つまり平地に雪が降る頃になると急激に地下水位が下がり、冬の間はほとんど変化せずに、雪どけが始まると徐々に水位を上げ、5月から6月にかけて夏の水位に戻っています。これは、湿原や山麓からの雪融け水が関係しているのでしょう。

しかし、今年の6月は雨がとても少なかったために、6月上旬をピークに水位が下がり始め、7月下旬にまとまった雨が降って、ようやく上がりはじめましたが、昨年の水位までにはなっていません。それと、奇妙なことに、湿原中央に設置した2号井はこれまで、湿原外側に設置した3号井より水位が下がらなかったのですが、6月下旬からはそれが逆転しています。まだまだ不思議ばかりですが、そのために調査を続けます。



井戸のしくみ

南浜湿原の井戸は、湿原の奥に西側から1号、2号、3号、4号と東西に横断するように4ヶ所設置しています。このうちの1号と4号は水位が自動的に記録され、月に一度それを回収するしくみになっていますが、2号と3号は1～2週間毎に物差しで水位を測っています。

井戸は太さ75ミリの塩ビパイプを、長さ1メートルまたは2メートルにして、底には蓋をして、下半分に5ミリ程の穴をたくさん開けて湿原に差し込んであります。

湿原の地下水は、開けたたくさんの穴からパイプに入り、その高さは水の圧力によって湿原の地下水位と同じになるので、その水面から井戸口まで測ると水位がわかります。

